

越後高田と地震

川崎市多摩区 竹林征雄 (高田市大町二丁目出身)

「その日」

三月十一日の東日本大震災により亡くなられた皆様、被災者として、二次的派性の福島第一原子力発電所事故による避難、被災された皆様へ哀悼の意とお見舞いを冒頭に申し上げます。

私は、地震当日、ある会合の集まりで、石垣島でバスに乗っていた。巨大地震を知ったのは仲間の方への家族からの一本の電話からだった。自分の家族などの安否はその日の夜遅くに携帯のメールで漸くわかり安堵した。しかし、その時以降、旅行のすべての予定は狂い、帰りたくとも飛行機が飛ばず、翌日やっと沖繩まで戻り、更にその翌十三日の最終便の飛行機で自宅へ戻った。

機内では、知り合いの気仙沼のカキ養殖者、勤め人時代の東北支店の人々の顔、郡山の友人、浪江町の自動車リサイクル

会社の経営者、そして事故を引き起こした福島原発第一号炉の自分が設計した炉心冷却ポンプの事などが頭のなかを何度も駆け巡った。さらに、地震のあった十一日の丁度一週間前、福島第一原子力発電所を見てきたばかりであり、地震が一週間早く襲って来ていたら、と思うと背筋がぞつとした。その折、昼食で寄ったホテルからのんびりと見ていた海に張り出した岩盤上の岡倉天心住居跡の六角堂を思い出していた。六角堂は建物の朱色と波の輝く白さ、そして海の群青色とのコントラストが何とも言えぬ、記憶に残る景色だった。後で分かったが、その建物はすべて津波により流されていた。当日あの瞬間、私は金石に気仙沼に、南三陸や浪江町に、そして天心の五浦海岸のあの場に、たまたま居なかったから生きて、今があり、駄文を書けるのだ。

この拙文は私のこれまでの能天気な生活を含め、生きてゆく覚悟、これからやることは何があるのかなどを、わずかにでも考えるよすがに、と記す次第。大方の方から見たら、失笑もの、そして古希を迎える身には時すでに遅しその感あるのだが。

「日本列島は傷だらけ」

日本には大きな断層が二十五、小さな断層は二千箇所を超える。まさしく傷だらけ、満身創痍の列島である。北は北海道から石垣島まで、地震や津波被害を受けない土地はない。比較的地震が少ない県は、私の記録の見落としが無ければ、群馬、岡山、山口、島根、福岡、佐賀などぐらい。主な地震の記録は、紀元前百年頃の仙台大震災・巨大津波として、かすかに残っている文献に始まり、現在までに、百四十ほどが文献で近年の観測データとともに記されている。一九〇〇年以降は観測技術も進歩し、より詳細な記録が残されている。ここ百十一年間での地震発生回数は約四百四十を数え、平均すると年間一・二回の地震が起きている。言ってみれば、日本のどこかで、大きな地震が毎年起きている勘定だ。さらに地震観測精度があがった一九二六年から二〇〇八年までの八十三

年間で、地震が発するエネルギーの大きさを表すマグニチュード(M) 6以上の地震記録は九百六十回を数える、と防災科学研究所から公表されている。これは何と単純計算では毎月一回はM6クラスが日本のどこかで発生していることになる。今回の地震のMは9と日本の歴史上最大であり、その揺れの程度を表す震度も7、東北の多くが震度6、関東で5強によりあれだけの大騒動、被害となった。地震と火山噴火なども関連性が強く、その上台風も多い列島である。このように二重三重に災害に見舞われることの多い列島であることを改めて意識して生活をしなければならぬ。これは宿命である。と今一度腹を括らざるを得ない。しかし一方で、日本は地球の息吹をどここの国よりも身近に感じ、自然の豊かき、四季折々の恵みを頂いていることにもなる。

「関東大震災と東日本大震災」

これまでの日本の地震ワースト記録は大正十二年、一九二三年九月の昼食の時間帯に起きた「関東大震災」である。この時のMは7.9、震度は7であった。死者と行方不明の総計は約十五万人、全半壊家屋約二十二万戸、焼失家屋約三十一万戸、被災者数約九十万に達した。震源地は小田原から三浦半島近辺にかけてである。大多数の方々は東京での被害の大きさを思い浮かべるが、地震そ

のものによる被害は震源地が相模湾であつたため、建物の倒壊などは神奈川県の方が数倍大きかつた。しかし、東京では、昼食時間帯で、折からの強風と、地震により引き起こされた百三十六ヶ所からの一斉火災が、木造家屋の密集した下町を中心に被害を大きく広げた。地震被害とは逆に火災被害は、東京の死者数を横浜の約二・五倍へ、焼失家屋は約五倍となつた。この地震では火災が被害を拡大したと言える。ちなみに、このときの地震による津波波高は、鎌倉で三メートル、そしてそれによる死者行方不明者約三百人、ほか三浦半島で六メートル、熱海と伊東が十二メートルとなつてゐる。

関東大震災から八十八年たつた今、まさに東京をM7・8の巨大直下型地震が襲つたと仮定すると、中央防災会議は一万千人の死者、全壊及び焼失家屋八十五万棟、国家予算規模をはるかに上回る百十二兆円の経済損失としてゐる。しかし、今回の震災と津波に伴う災害に對して、閣議が決めた呼称「東日本大震災」が引き金となり、関東で巨大地震が起きる確率は高まつたとし、国はすべての被害想定を見直し急遽対応検討に入つてゐると(財)都市防災研究所の関係者から話を聞いた。

気象庁発表の地震名で「東北関東大地震」は、世界ワースト記録の歴代第七

位となり、「東日本大震災」は関東大震災をはるかに上回る規模となつた。今回の地震は千年に一度の巨大地震と言われ、M9は阪神・淡路の約千四百倍のエネルギー放出であり、日本記録を塗り替えた。震源域も約五百キロメートルと途方もなく長い。被害状況は新聞で毎日公表されており警察庁発表では、死者一万五千二百七十八人、行方不明八千四百九十七人、避難者は当初の二十万人から十万三千二十一人と減りはしたが、今もつて十万と言ふ数値を越えている。死者などの55%が六十五歳以上であることも時代を映している。このほかに、全半壊と浸水家屋が約十八万戸、漁港被害は岩手、宮城、福島の一七十七

漁港中二百六十、漁船は二・六万隻、瓦礫は千五百萬トン(ダンブ)二百四十万台分、廃自動車十四・五万台で、被害総額は二兆円を越えると言われている。話はそれるが、この地震での東京は震度5強で、死者七名、三百万人の帰宅困難者を生み、一日近々交通も通信も機能せず、高級住宅地浦安は液状化で大きな被害を受けた。

東日本大震災の被害特徴は地震そのものと言ふより大多数が津波によるものであつた。しかも天災と言ふか人災と言ふか、東電福島原発事故が追い討ちを掛け、この被害総額が五兆円と、巨額な数字だ。

地震、津波、原発事故、風評被害、さらにお粗末な政治と、被災地に取り五重苦と言ふこれまでにないものである。これは今後の二十一世紀社会への大変動を示唆しているのだろうか。哀しく、情けないことこの上ない状況だ。

今回津波による潮上高の最大数値は宮古で三十八・九メートルを記録し、潮上高三メートルを越えた地域は宮古から久慈までの沿岸十二キロメートルにも及ぶものであつたことが東大地震研の調査でわかつた。大津波で、東北の至る所に「こより下に住むな」と言ふ石碑、古文書、口伝があつたにもかかわらず、住まい、公的機関を浜辺近くにどんどん造つてきた。これまでの津波最高記録は、驚くべきことに一七一年に八重山諸島を八十五メートルもの津波が襲つた。世界では一九五八年アラスカで五百二十メートルを記録している。

月の引力は海水に働き、潮の干満を生じさせる。同様に、引力は地球自身にも働き、この現象を地球潮汐という。地球潮汐による力が断層の滑りを助ける方向に働いている時に、地震が多く発生していることも解明されている。そして断層に加わる力は地殻のひずみによる力の約千分の一に過ぎないが、十分にひずみがたまつた断層に「最後の一押し」として働いて今回の地震も発生したと学者は言

う。
地震発生の午後三時前後の潮の干満は、幸いなことに上弦の月の小潮干潮時で津波被害は軽減されたにも拘わらず、大惨事となつた。これが大潮満潮時であつたら、各地で、さらなる大災害となつていただろう。

釜石の海底から高さ六十三メートルの巨大防波堤を津波が乗り越え、防波堤を破壊してしまつた。防波堤が津波の力を弱めたことは間違いないが、自然景観、生態系を損ない、三十一年の歳月と約千二百億円の費用を掛け、ギネスブックにも記載されたこの防波堤とは何だつたのだろうか。海沿いに住んでいた被災者の方々は防波堤で守られ、安全と過信し、一部の方は明治、昭和の巨大三陸地震のことを失念してゐたと言葉も聞く。そう、明治の物理学者で名随筆家寺田虎彦の至言「天災は忘れた頃にやってくる」が今思い出される。

五月二十六日の朝刊には二〇〇年前後、一七〇七年と千年に一度ではなく、これまでに五百年前後の間隔で巨大地震があつたと産業技術総合研究所と広島大学が発表している。また、京大鎌田浩毅教授は六月号の文藝春秋で、三月十二日の長野栄村での内陸部直下型地震は巨大地震による誘発であり、高田の人々の記憶に新しい二〇〇四年、二〇〇七年の新

潟県での大地震も直下型で、今後、この手の直下型地震が当分誘導多発する可能性を示唆している。

「越後高田の地震」

それでは、ふるさと高田の地震に関する歴史はどうなっているだろうか？と雖ながら記録を漁ってみた。地震と津波の記録は様々な関係機関から発表されている。たとえば、日本地震学会や、理科年表、地震調査研究推進本部事務局（文科省研究開発局地震・防災研究課）、独立行政法人防災科学技術研究所、様々な大学などから震源地がM7以上、または震度で最大6弱以上、死者・行方不明者一人以上の条件に当たる記録が開示されている。色々な機関から、主な地震年代表も出ており、引用、表現もほぼ同じものもあるが、異なる記述の箇所もある。それらの中から、震源地が高田界限のものを拾った。それを纏めたのが九ページの表である。記録のある八六三年以降を見ると、何とその回数は八回に及び、単純計算では百四十年に一回、高田は大地震に襲われている。

今後高田でこの三十年以内にM7クラスの巨大地震が発生する確率はほぼ0.8%とある。地震調査研究推進本部資料によると高田には「高田平野断層帯」があり、この断層帯の平均活動間隔は

一七五一年の宝暦の地震を起点として、二二〇〇～四八〇〇年程度の可能性とされ、この数字を信用するならば安心出来る。高田平野東縁断層帯は、高田から妙高に至る、長さ約二十六キロメートルの断層帯で、概ね北北東～南南西方向に延びている。この断層帯の近傍には関わりたくないものだ。

高田平野の地震は、越後平野や粟島周辺の地震と連動することが多いようだ。例えば一六六六年寛文の高田地震の四年後の一六七〇年に西浦原地震、一七五一年宝暦高田地震の十一年後に一七六二年佐渡沖地震、さらに一八二八年三条地震のあと一八三三年の庄内沖地震、一八四七年善光寺地震、一八四七年弘化高田地震と続いている。間隔から言うと、

一九六四年新潟地震の前後に高田の地震があつても不思議はなかつたが、このときは高田は無事であつた。その代わり少し南で一六六五年から一六六七年にかけて松代群発地震が発生している。このように、粟島周辺から越後平野とこの地域の地震には比較的規則的な繰り返しと連動の関係性が認められるので、一方で発生した場合ももう一方の地域の中期的予測の有力な判断材料になるとされている。平成二十二年に東大地震研の佐竹健治教授らが古地震・津波等の史資料収集解析を行っている。これらの詳細な解

析が進むと地震の地域連動性や詳しい地震の歴史が明らかとなり、今後の震災対応策がたて易くなるものと考ええる。

高田の三大地震と言われているものに寛文、宝暦、弘化の3つがあり、ほぼ百年の周期で起きている。これらの地震を見てゆくと、親覺ゆかりの淨興寺のHPへ飛び、そこには、一六六六年寛文五年十二月二十七日夕方に起きた大地震で淨興寺の堂宇が崩壊し、時の藩主松平光長公の市街復興計画に従い現在の堂宇を建立された、と出ていた。見ているうちに、高田に居た頃、寺町にある先生や友達の家遊びに行つたことや本堂裏手にあつた親父などが眠る墓、そこからの田んぼの向こうの愛の風あたりをぼんやりと眺めたことなどが思い出された。その本堂は正の寺町大火からも逃れ、建立以来約三百五十年の月日が流れている。尚、その年の暮れは大雪で約四二メートルの積雪があり、火事騒ぎの中で雪で逃げ場も無く約千五百人の死者が出たとある。幕府は米三千俵の見舞いを出し、越後騒動で有名な老小栗美作は幕府から五万両を借り受けて復興し、と史に出てくる。

「宝暦元年越後越中地震」

ここで、高田地方最大規模の地震であつた一七五一年の「越後越中地震」と

呼ばれる地震について述べておく。

姫路から寛保元年、一七四一年に高田へ国替えしてきた十五万石の高田藩主榊原は、丁度その十年後にこの大震災に見舞われた。時は宝暦元年四月二十五日の夜中に起きたものであつた。この地震による代表的な被害は、直江津と糸魚川の間の各地で多くの山崩れが起き、死者が出た。特に、標高百メートルも切り立ち、東西一キロメートル近くも海にせり出している名立の断崖絶壁が、地震と雪崩により崩れ落ち、集落は海底に埋没すると言ふ悲惨な状況となつた。そして、名立小泊村の九十一戸の村は三軒を残し全滅し、四百六人が死亡するなど、この地震は多大な被害をもたらした。その痕跡は現在、名立大町の宗龍寺の裏手に見られる崩落崖である。このとき起つた「名立崩れ」の名残である「名立崩れの露頭」は現在の北陸自動車道「名立谷浜」インターの直ぐ下に見られる、とある。その悲劇の小泊村がいつもの暮らしに戻るまでには百年以上の歳月が費やされたと記録が語っている。

また、高田城も、所々破損し、町の三箇所から出火し、家屋の全半壊は九千三百軒、死者行方不明者の合計約千二百名と出ている。話が横へそれるが、この時代の高田は大会であつたことがこれで分かる記述だ。この震災復興のた

めに、高田藩は幕府に一万両借入れの救済を求めている。この震源は直江津沖の海底下と言われ、規模はM7から7.4と大きく、それで富山、金沢も強い揺れを感じ、日光でも地震が体に感じられたとされ、余震も多かったようである。

余談だが、二つほど、この地震にまつわる話を記す。

一つは糸魚川の(株)谷村建設のホームページに市出身の医学博士種村正臣氏が二〇〇五年に書かれた随想を簡単に紹介する。

宝暦元年四月、前田藩主が参勤交代で江戸から加賀に向かい、高田を過ぎ名立で宿泊することとなった。前田公は名立に到着すると間もなく体調の不良を訴えた。お付の侍医が診察するも原因が判らず、北陸街道随一の名医として名高い地元の相澤玄伯に診察をお願いした。しかし、玄伯にも悪いところを見つけないでできなかった。相変わらず身体の不調を訴えつづける前田公に対し、ついに玄伯は「身体に異常なきにもかかわらず不快なのはこの土地になんらかの不吉な事因がある故で、速やかにこの土地をお去りになるれるのがよろしいかと存じます」と進言した。納得した前田公は、即時出発の命を下されて名立を離れた。一行が隣村の能生の本陣に着くと不思議にも公の気分が良くなった。その夜、名立

に壊滅的な大地震が起った。前田公の病は天変地異に反応して精神的な不快を起したものととも考えられる。そして「土地に異常あり」と見立てた玄伯は、医学のみならず博学達識な学者であると、一層評判が高まったと出ている。

二つ目は絵の話である。新潟県立図書館にはこの宝暦の地震の模様を海から眺めた海岸部の景観図が残されている。題は「不知親知難所五百三十五間・駒返難所四百間」と長いもので、作者不詳、製作年代は江戸時代というだけである。絵には、この「名立崩れ」の様子が詳細に表現されている。と図書館のHPに文章とともに絵も載っていた。そして、手元の市史にも、高田図書館へ兵庫佐野清輔氏から寄贈された「宝暦地震絵図」が載っている。私はパソコンの中の絵と本の絵を見比べたが、二つの絵は異なるもののようにだ。この地震は大ニユースで、江戸時代何人かの絵師が描いたものがあちらこちらに残ったのではないだろうか。昔も今も大震災には多くの耳目が集まることとが分かる。

「その後」

経済の成長により都市も人も沿岸へと集まり、都市は巨大化し、特に東京は一極集中化していった。しかも原子力発電所も、都市も住宅地もいい加減な調査に

より、活断層の上、または近傍に、そして埋立地などに建設されているところも多くなり、危険極まりないことだ。高田の人間ならば誰もが知っている有名な断層は「糸魚川・静岡構造線」である。これは、親不知から諏訪湖を通って、静岡の安倍川に至る大断層線である。しかもこれは日本最大級の活断層で、今後の地震発生確率が最も高いもののひとつと考えられている。日本アルプスは糸魚川・静岡構造線に沿って造られており、飛騨山脈や赤石山脈の高山が沿線に連なり、主山山としては、白馬岳、乗鞍岳、上高地、赤石岳、身延山などが險しい稜線を連ねている。高田は糸魚川から地理的に離れている、遠い先の話と考えず、冷静に今からでも、大地震のリスクマネジメント、企業では事業継続性、個人でも家族と住まいの安全についての準備をすることが必要ではなからうか。

損失八十一兆円としている。繰り返すが、東京直下型大地震が起けると損失は百十五兆円であり、これはさらに膨らむ恐れがある。こんな想定は教授には悪いがはすれて欲しいと願うが、虚しく衰しいことになるのだろうか。

前出の鎌田教授は富士山の噴火の恐れについても述べられ、さらに恐ろしいのは南海トラフ沿いの東海・東南海・南海の三連動型によるM9クラスの巨大地震が、二〇三〇年代には西日本一帯に必ず起きると、危機感を募らせている。この巨大地震は百年間隔で発生しており、しかもその三回に一回は超弩級であり、次回はこの周期に当たるとし、被害想定は、犠牲者一・五万人、全壊五十五万棟、

地球科学的に考え、日本主土が間違はなく本格的な変動期に突入したと言われている。このように日本は地震、津波そして火山の爆発、台風などに暮らしを脅かされている。自然の力には逆らえないが、上手くかわしつつ、自然と付き合う方策を普段より一層考えておく必要がある。今回の東日本大震災で分かる通り、科学による力では自然の力をねじ伏せることなど出来ない。技術に依存、技術を過信していたことを十分に謙虚に反省してみてはどうだろうか。災害を恐れるが、怯えることなく、自然を理解し、冷静に自らの生活を考え、自然を敬い、自然との協調、共生を目指して生活と生産を考えることがまずは大切ではないだろうか。その上で今一度、科学・技術と生活様式、自然環境などとの関係と調和を図らねばならない。

産、能力(体力、知識、経験)、時間などを合せて何ができるか、何をすべきかを考えた。どうも義援金だけ出せば事が済む話ではないのではないかと思ひ始め、機会をとりえて行つてきた。電車が仙台までしか通じていないので、後は車で石巻、女川、南三陸、気仙沼、陸前高田、大船渡を廻り、南三陸町歌津地区へ戻り三日間ボランティア活動をした。仕事は物資の運搬、漂流物の収集運搬などを主に行い、立ったままの食事や TENT泊りであった。南三陸町は志津川町と歌津町が合併した町で、まさにカキ、ホタテの養殖、蛸漁などの漁業が主体で、何もなければ、のどかで魚付き林の緑豊かな人江だ。被害は死者と行方不明者約千二百名、五千四百戸のうち全壊家屋が三千九百を数えた。物的被害は甚大だが、死者行方不明者が人口の割に少ない。それは口伝などで急いで逃げる事が徹底していたからと聞いた。しかし、震災当初は九千五百名が避難生活をされ、今でも人口約一万七千人の三割に相当する五千人の方々が体育館などで避難生活をされている。そして地盤が〇・七メートル沈下し、水平方向に四・五メートル移動した町である。

電車の駅舎も流され、陸に打ち上げられた船、ひしゃげて裏返しになった車、壁がなくなり柱だけになり向こうの景色が見渡せる建物、道路の両側は延々と瓦礫の山の惨状が眼一杯に広がる。砂塵が風に舞い、ウミネコがぐずと化した大量の魚の上を飛び交い、その魚の腐臭が鼻を突く、そしてトタン板などが風に煽られて不気味な音を響かせていた。そして、すべてが無くなった風の中、見通しが良くなりつつありとした海岸と、道の両側が瓦礫の山となった曇りの夕暮れの風景。その道を手拭で頬拭りした老人が一人、小さなビニール袋を持ち、とほとほと歩く背中にはなんととも言えない寂寥感が漂っていた。無力で、浅知恵、猿知恵でしかないこれまでの己の狭い考えと愚にもつかぬ行動に改めて気付かされずにはいられなかった。

被災地での乏しい体験から少し見えたことは、世界も日本も資本主義の波やグローバル化の波に乗り、経済性、効率化、巨大化、集中化、お金と言言葉が何よりも重いものに思われ、踊らされてきた感がある。近代科学・合理主義にも限界があるのではないか。ここの時代でありながら、ぐずぐずと無駄な時間が流れていった。これに追いかぶせ、虚しい響きの想定外と言う大震災、災禍が見舞ったのだ。今、三・一一を契機に、文明の形そのものの見直しと社会の枠組みを変えることが求められ始めていると感ずる。昔の日本の農耕漁撈社会は共同作業社会で、そこには忘己利他、先人後己などと利他的精神や共生、共助が芽生え、欲望の制御が出来ていた。近年は、この思いが欠けていたというか、たいして意味を持たない多忙と多くの物に囲まれ、お金を多く持つことが幸せ、と勘違いをしてきた。プータンの国民総幸福量のような公共哲学が我々にも必要ではないか。満足とは何か。多くの人は震災で目が覚め、「形あるものは壊れる」、「何が本物で大事か」が見えてきた。これまでの「無関心から繋がり」と絆、「冷たいお金から温もり」や意思あるお金の使い方、「画一巨大集中化から多様性と小規模分散化」などの声が聞こえ始めた。

では、「凡て物微自り顕に至るは、亦尋常」とある。すべて物事は小さなものからだんだん大きなものになっていく。それが普通の生き方である。震災風潮というものの、まだ小さいうちに人々が心を入れかえて身を正していけば、このような災害にならなかつたのに、人々がとめどなく震災に走つたから地震が生じたのだ。とうたつてゐる。ふるりの良寛は捨てる事を考え、富の拘束よりは貧の無拘束による自由を選び、自身のことをまさに大愚、愚直、風顛、樵癡と言ひ、我執を一切取り払つた。だからこそ、このような思を抱いたのだと感ずる。天災と人の行いとの間に関係性があるのか無いのかは問いたくはないものだ。因みに、私の中高の同級生北川若菜さん弟のフラム君の父君省一氏は良寛研究家であり「漂泊の人 良寛」を朝日新聞から出されている。

被災地に、自然はとてつもない地震・津波を引き起こし、情け容赦なく苛酷で無情の雨を降らせた。しかし、自然は時が巡り、何事もなかつたかの如く、一階まで津波がきた伊里前小学校の校庭にも拘らず、椿が咲き、桜が咲き、花壇には津波にも残つた水仙が香りを振り撒いていた。自然は食物を育て、魚を育てて我々に恵みをもたらし、本当に不思議と優しい。この落差はなんなのか、と考えつつ

大地^{ちがひ}死^し々として 智^ち斯^その如^{ごと}し
我^{われ}独^{ひとり}り 歸^{かへり}陶^{たう}たるも 阿^あ誰^{たれ}にか 訴^うたえん
凡^{すべ}て物^{もの}微^み自^{より}顯^{けん}に至^{いた}るは 赤^{あか}毒^{どく}常^{じょう}
遠^{とほ}國^{くに}の災^{わざ}禍^{わざ} 尚^{なほ}運^{うん}きに似^にたり
星^{せい}辰^{てん}度^どを 失^うさうこと 何^{なん}ぞ能^{あた}く知^しらん
歲^{さい}序^{しよ}節^{せつ}無^なきこと 已^{すで}に時^{とき}多^{おほ}し
若^もし此^この意^いを傳^{つた}へ 須^{すべ}く自^{みづか}省^{ちか}すべし
何^{なん}ぞ必^{かなら}ずしも人^{ひと}を怨^{うら}み天^{てん}を咎^{とが}めて
女^{にょ}原^{げん}に 勞^{らう}わんや

地震^{じしん}は 信^{まこと}に大^{たい}変^{へん}に候^{こう}。

野僧^{やそう}草庵^{そうあん}何事^{なんじ}なく候^{こう}。

親類^{しんるい}中^{ちゆう}、死人^{しにん}もなぐめで度^{たぐさじ}存^{ぞん}候^{こう}。

うちつげに 死^しなば死^しなすて 存^{ぞん}へて

かかる憂^{うれ}き目^めを 見^みるがはむびしさ

しかし災難^{さいなん}は 運時^{うんじ}節^{せつ}には災難^{さいなん}に 運^うかよく候^{こう}

死ぬ時^{しぬとき}節^{せつ}には死ぬ^{しぬ}がよく候^{こう}。

是^こはこゝ災難^{さいなん}を 逃^{のが}るる 妙^{みょう}法^{ぽう}にて候^{こう}。

かしこ

良寛^{りょうかん}

歳^{とし}八^{はち}

山田杜卓老^{やまだとつちやうら} 良寛^{りょうかん}

西 暦	和 暦	名 前	M	死者	記 事
863-7/10	貞観 5-6/17	越中 越後			直江津付近にあった数個の小島が 壊滅したという
1502-1/28	文亀 1-12/10	越後 南西部	6.5～7	多数	直江津で潰家、会津でも強く揺れる
1517-7/18	永正 14-6/20	越後			倒家が多かった、詳細不明
1614-11/26	慶長 19-10/25				従来、越後高田の地震とされていた もの。大地震の割に史料が少なく、 震源については検討すべきことが 多い。京都で家屋・社寺などが倒壊 し、死2、傷370という。京都付近 の地震とする説がある
1666-2/1	寛文 5-12/27	越後 西部	6.75	1500	積雪14～15尺のときに、高田城破 損、侍屋敷 700余潰れ、民家の倒 潰も多かった。夜火災
1751-5/21	宝暦 1-5/26	越後 越中	7～7.4	1541	高田城で所々破損、町方3ヶ所出火。 鉢崎・糸魚川間の谷で山崩れ多く、 圧死多数。震源地は直江津沖下。
1847-5/8	弘化 4-1/1	越後 高田	7		諸所破損、長屋も破損 震源地は高田平野南部の山際
1847-5/13	弘化 4-3/29	越後 頸城	6.5	松本 含め 8000 とも	善光寺地震の被害と区別できない ところが多い。潰家・大破・死傷が あり、地割れを生じ、泥を噴出し、 田畑が埋没したところもあった